

修文錬武

日本空手協会 市川支部

令和4年
第6号
12月7日

日本空手協会第33回関

八州覚醒親善空手道大会

8年に一度の本県主催の大会は、10月9日(日)千葉工大新習志野キャンパス体育館にて行われた。出場者は男子40歳〜70歳以上の7部門、女子35歳〜60歳以上の6部門、生涯空手を目指し、「熟年、泰山」の熱気に溢れていました。

市川支部の出場者は壮年男子の村越弥之四段と泰山女子四宮弥生四段の2名のみ。試合は両者引き分けはジャンプの判定だったり、和気藹々(あいあい)の大会です。それでも見ごたえのある試合も多くあった。

運営委員のコート係として、三須、小林、山岸、高部、平山、ジェニファ―各氏が当たる。間近くみるシニアの選手の活躍に感銘する。矢張、大会を見るは良い刺激である。

激戦区壮年男子(50〜54歳)村越さんは前日の資格試験と相まって



毎回の大会に出場している。惜しくも入賞を逸する。その資格試験、指導B、審査Cに合格している。

弥生四段は泰山女子(60歳)形の部2位。形名半月(四宮記)。

英国指導員太田先生来

場

10月14日、総本部秋季全国合宿の最終日午前、市川支部に太田先生が

来場する。先生は英国のみならず全欧州の指導者である。その指導は言葉の枠を超え、空手協会特有の何人とも分り易く、丁寧である。

受講者、村越、三須、四宮、高部、鶴岡、池田、恵大、大平、小林(敬称略、裏写真)。因みに三須さんは小学生(上の写真―全国大会、デモンストレーション団体形)の頃、仙台市での小中学生全国大会で、太田先生率いる初参加の英国少女中学生と、同宿している。

デモンストレーション演武は、日本武道館であった。

市川市々民大会

11月23日 国府台市民体育館、支部選手20名。久し振りの会派を超えた市の大会です。当日は生憎の雨でしたが、館内は小学生から大人までの熱気に溢れ、さらに昼食時は、沖縄本場のサイ、ヌンチャク、權を使った演武の披露もありました。

大会に出て、自己表現することは大事なことです。その場において、体現することは自己成長となります。まして志を同じくする人との交流は、この上なく人として幅を広げます。係り員の支部の方々がとうございました。

歳時記

いつの間に12月、一年の納め時となると誰もが憧れる黒帯取得、審査会がある。一級ともなると、なんとしても初段欲しきを持つ。初段認定は一体誰がするのか▼県の審査会では、五人もの先生方が正面に座っている。号令をかける人は別に立っている。コロナ禍では、各道場単位の審査であった。各支部ともその先生が審査をしている。だからその先生が合否を決めている▼いや、外部からもう一人がいる。それにしても、なんで県は五人もいるんだろう。級審査会もそうである。審査前、初段を受けますと言って何で断られたんだろう、と思っただ。通常審査は各支部毎、A級審査員資格、七段以上の先生で行える▼しかし、その資格を持っていない支部は資格のある先生を呼ばなくてはならない。そう簡単に段は出せない。12月の審査会は県で、五人の審査員は七段、A級審査員である▼自分の支部受審者であっても依怙鼻負(えこひいき)はできない。実力のない者が受審しても恥をかくのは指導者である。あんなに憧れた初段なのに、その後二段を受ける人はなぜか、極端に少ない。五人ものA級審査員は千葉県だけである。



蹴鞠つて まず音で「しゅうぎ

く」、訓では「けまり」と読む。中国が発祥で日本では鎌倉時代には伝来して、大河ドラマ「鎌倉殿と13人」にも出てくる。モンゴルが13世紀ユラシア大陸を席卷する。その時あたりからサッカーの原義となる。

4年毎のW杯、日本チームの話題しきりである。なにしろ最強チーム、ドイツ、スペインに逆転勝ちしている。

ドイツ、スペインのみならず、ヨーロッパ、世界中が驚愕した。その勝因は早くに、日本人選手のヨーロッパチームでの活躍を挙げた。26人中、19人がそうである。内9人はドイツである。

今から58年前、1964年の一回目の東京五輪のことである。サッカーの日本強化請負人は、ドイツ人テッド・マール・クラマーさんであった。「日本サッカーの父」とも呼ばれた氏は、その東京五輪で日本チームをベスト8、4年後のメキシコで堂々3位の成果をもたらした。

W杯での勝利はクラマーさんへの恩返しである。お家芸を覆すに60年を要している。武道である空手はどうであろうか。指導員体制を持つ空手協会と、全空連とは自ずと差異がある。スポーツか武道かの違いであろう。

審査要綱立ち方1自然体―気を

付け、両足の踵をつけ、つま先を60度に開く。両手は手刀受け、親指第一関節を曲げ、中指がズボンの縫い目に沿うあたりに付ける。次に左足から一足位、次に右足を、足の外側が肩幅、内側が腰幅位に開き、同時に握った拳を軽く前に出す。

2 左足前、前屈立ち―1の自然体の幅を保ちながら、左足を前に膝と足のつま先とが一致するあたりに出す。後ろ足は伸ばし、踵は床に付ける。右膝を折って床につけ、膝の縦のラインと左足の横のラインとが握り拳二つ分位である。体重比は前7、後ろ3。

3 そのまま後ろ足を軸に右45度に体重比5、5、両つま先平行が騎馬立。4 後ろ足6、前足を右へスライドし4の体重比で後屈立。

7 級までの蹴りはその場基本で、騎馬立ちでの移動は6級からである。

形は太極初段、平安初段を経て、平安二段。組手も五本組手から基本一本。いよいよ緑帯である。

受け極めの連続技は5級から。上段揚げ受け逆突き、中段外受け逆突き。4級になると、三本連突き、手刀受け後屈立ちからの刻み蹴り・前屈貫手が入ってくる。

形は「平安」中、最も難解な四段。左右蹴上げ横猿臂、左手下段、右手上段受けからの上段縦回し打ち。そして右手引き寄せ、同時に左手相手を押しながらの裏拳打ち。

いよいよ3級、準初段。組手が自由一本。基本、形はともかく組手で相手に潰されないように。矢張、基本の積

み重ねができていたかが問われる。無事茶帯になれたと思っても、ここからの研鑽、努力がないとそのまままで終わってしまう。

外受け、横猿臂、回し蹴りは二級から。形は最難関鉄騎初段、一級は拔塞大。自由一本に蹴込み、廻し蹴りが加わる。

初段は一級にほぼ同じ。横猿臂に裏拳逆突き、内受けに刻み突き、その場前蹴りが加わる。



上の写真は精励賞受賞。空手雑誌「JKFan」10月号に記事がある。